

# 人権コラム 心、豊かに

## ◆本当は危ない「無関心」

皆さんは次のような詩をご存知でしょうか。

“ナチスが最初共産主義者を攻撃したとき、私は声をあげなかった 私は共産主義者ではなかったから 社会民主主義者が牢獄に入れられたとき、私は声をあげなかった 私は社会民主主義者ではなかったから 彼らが労働組合員たちを攻撃したとき、私は声をあげなかった 私は労働組合員ではなかったから そして、彼らが私を攻撃したとき、私のために声をあげる者は、誰一人残っていませんでした”

この詩はドイツの牧師であり反ナチ運動組織の告白教会の指導者を務めたマルティン・ニーメラーが講演などで語った言葉を元にして生まれたものだと言われています。

この詩の内容は単に「戦争中に外国で起きた過去の出来事」というだけではなく、「いつか誰かの身に起きるかもしれないこと」と捉えることもできるのではないのでしょうか。例えば、「共産主義者」「社会民主主義者」「労働組合員」を「障害のある人」や「被災者」等のように様々な人権問題に置き換えて考えてみると分かりやすいかもしれません。今はそうではなくても、突然の事故で後遺症が残ることや、住んでいる地域で大規模な災害が発生するといったことは誰の身にも起こり得るのです。

近年では、SNSなどのインターネット上で様々な属性の人に対する偏見に基づく差別的な発言や誹謗中傷などが行われています。「自分は当事者ではないから」「自分が差別をしているわけではないから」と傍観者になっていると、気付かぬうちに加害者側になっていたり自分や家族が攻撃の対象になっていたりする可能性があります。

ニーメラーの「私のために声をあげる者は、誰一人残っていませんでした」という悲劇を回避するためには、日頃から一人ひとりが様々な人権問題にアンテナを張っておくことが重要なのではないのでしょうか。